

世の中に馬のよしあしを見抜く名人がいて、そこで初めて、一日に千里を走ることができ  
る名馬が存在することになる。千里の能力を持つ名馬はいつも存在するのだが、馬のよしあ  
しを見抜く名人は、いつもいるとは限らない。そのために、名馬はいるけれども、ただ（む  
なしく）下僕たちに粗末に扱われるだけで、馬小屋で首を並べて死んでいき、千里の名馬と  
してたたえられることもないのだ。

一日に千里を走る力がある馬は、一回の食事によつては一石もの雑穀をたいらげ  
ることもある。（ところが）馬を飼う人は、（その馬が）一日に千里を走る（力がある）こと  
を知つて養うわけではないのだ。（そのために）その馬は、一日に千里を走る能力があるけ  
れども、（食事をして）腹いっぱいにならないので、力は出し切れず、優れた才能も外に示  
しようがない。そのうえ、普通の馬と同じように働こうとしても、それさえできないのであ  
る。（このような環境では）どうしてその名馬が千里を走れることを望めるだろうか。いや、  
望めない。

名馬にふさわしいやり方で調教せず、名馬としての才能を十分に引き出すことができる  
ように食事をさせない。（馬が）主人に向かつていななくても（飼い主は馬の）気持ちを通  
解することができない。（それでいて）飼い主はむちを手にしては馬に向かつて、「天下に名  
馬はいない。」と言う。ああ、本当に名馬はいないのだろうか、（それとも）実は名馬を見抜  
くことができないのか。